

初期比較思想学会の思い出——その活動と理念に関して

保坂俊司

比較思想学会と私の出会いは、第五（昭53）回の早稲田大学での学術大会であった。当時、学部学生ではあったが、懇親会に参加させていただき、中村元先生に直接入会したい旨申し上げると、ご快諾いただき、同時に当時の事務局長であられた峰島旭雄先生をご紹介いただいた。以来、中村、峰島両先生にご指導をいただき、今日に至っている。その間の思い出や出来事を含めて、草創期の比較思想学会の雰囲気やその学問的な方向性に関して、お伝えしたい。

まず、初期の比較思想学会は、前述の様に研究者中心の学会ではなく、学びに関心のある人々を積極的に受け入れる、という基本方針を持っていた。その為に、学ぶ、研究する意欲のある人々は、殆ど例外なく受け入れていた。その証拠に、私のような学部生が入会できたわけである。また、一般の学会のように、大学等のアカデミックな施設での大会開催に拘らず、大学のない地方都市でも、市町村の教育委員会などと協力して、積極的に地方大会

を開催した。

私が特に印象に残っている大会は、佐渡島で行われた第八回大会である。比較思想大会は、創設以来大正大学の西洋哲学研究室に、事務局を担当していただいております、その負担は大変なものであると常々感謝申し上げているが、その故に地方大会であっても、万事滞りなく大会運営が出来るという優れた運営方針を現在でも維持している。その本領発揮の第一回目が、この佐渡における学術大会の開催であったと記憶している。勿論、並々ならぬ事務局員の皆さんの犠牲的な精神の上に成り立っているわけである。

さて、その佐渡での学術大会では現在の本会の事務局長の白木先生の厳父故白木淑夫先生が中心となり、開催してくださった。入会間もない私は、会場整理係的な立場で参加した。当日は、白木先生の御自房に宿泊させていただき、朝から巨大なヒラメの料理をご馳走していただいたことが、今でも印象に残っている。その後、比較思想学会は中村、峰島両先生が中心となり、地方で

の大会開催を含めて、積極的に活動していった。時には、春秋二回の大会開催も実施した。その第二回目は香川県の坂出で地域の知的なリーダーであった日本画家の濱野年宏氏が中心となり開催が実現した。

この様に、草創期の比較思想学会は、地方の知的な啓発活動にも熱心に取り組み続けていたことが、一時二〇〇〇人近く会員を擁する学会に成長した原動力であったことは事実である。その原動力は、峰島旭雄先生の驚異的な事務処理能力と大正大学西洋哲学研究室の皆さん、特に故日下部哲夫、同遠藤海蔵両氏の努力のたまものであったことは、感謝のみである。

比較思想学会の成果としての「比較思想辞典」の刊行

この他に比較思想学会の学術的な成果の一つとして上げられるのが、「比較思想辞典」(二〇〇〇年、東京書籍刊)の出版である。この辞典は、比較思想学会の二〇年に及ぶ成果の結集、いわば学会の知的活動の精華ともいえるもので、この編集事業は、出版までに一〇年以上を要した学会を上げての大事業であった。

この作業は、項目選び・執筆依頼から、原稿のチェックなどを含めた編集作業を、峰島先生を編集責任者、芹川博通先生を事務主任、そして事務編集として宮野升宏先生、頼住光子先生、佐藤貢悦先生と私保坂俊司、さらに残念ながら病のために完成目前に逝かれた浮田雄一各氏が担当し、東京書籍からは辞典編集部へのテラン井上浩一郎氏が加わり、月に二回ほど時に深夜に及ぶ編集作業が一〇年にも及んだ事業であった。

前述の様に「比較思想」辞典は、かなり難産で、結果的に監修者の中村元先生の生存中には出版することが出来なかった。この点は、大変残念であったが、日本の比較思想の金字塔的な業績となったことは、事実である。

中村先生は、予め用意されていた「比較思想辞典」の「発刊に際して」において、「二〇世紀は「ころ」を大切にす時代、哲学、倫理、宗教へ関心が高まっていった時代、と位置づけることが出来る」として、「二〇世紀は「比較の世紀」と言って良いであろう。」と述べられている。しかも、中村先生は、比較思想を「二〇世紀の学問の最先端を行く」と位置づけ、更にこの辞典を比較思想の「内包と外延にわたり」その思想を開陳したことで、学会の進展に寄与するものと、位置づけられている。

ところで本書の編集事業開始直後に、イスラム研究領域に貢献してくださる筈であった五十嵐一(一九四七〜一九九二)先生が、未だに真犯人は不明であるが、凶刃に倒れたことは、残念な出来事であった。編集会議に参加された折り、五十嵐先生に「先生、大丈夫ですか」と尋ねると「イスラムは、言われているような狭量な宗教ではありません」と答えられた。ご冥福を祈るばかりである。

初期の比較思想学会が目指した

「奴隸の学問からの解放」とは

さて、学会成立五十周年ということもあり、比較思想学会の成り立ちと、その学問的な方向性に関して、改めて紹介して

おく必要があろう。

そもそも、比較思想学会を創設するという意図の発端は、中村元先生がしばしばお話しされていたように「奴隷の学問からの解放」という刺激的な発想にあった。一見突飛な発想のようであるが、実は中村元先生を中心に、比較思想学会の創設メンバーの多くは、不幸な第二次世界大戦（大東亜戦争）のために、学生・若手研究者時代に外国で学業を修得されたことがなく、その意味で欧米の学問への従属（学生としての立場）感が稀薄である分、学問的な中立性が高いように思われる。そのためであろうか、また丁度日本経済が空前の発展を遂げ、日本人の心が世界的な視野を持つことを歓迎したという背景もあったかもしれない。その厳密な分析は他の機会に譲るとして、比較思想を通じて明治以来の従属的な学問界に、真理探究に東西の格差なしという立場から、日本発の創造的な学問を打ち立てようという気概を持っておられたことは事実である。

特に、中村先生は、学生としてではなく、教師としてアメリカに乗り込んだという特異な体験が有ったのであろうが、西洋中心の学問体系に対して、決して追従することを吉とされなかった。その意味で、真の学問の独立という視点をこの比較思想において実現し、またその精神や方法論を共有し、発展させようとして、この比較思想学会の創設と発展に尽力されたのであろう。

この点を象徴する言葉として、中村先生は、しばしば、「奴隷の学問からの解放」とその為の「一番槍となる」という言葉を使われた。かなり過激な表現であるが、常々、中村元先生は、現在

の所謂哲学領域の関心やその教育が、時代の要請に依っていない、という思いを口にされ、また文章に書かれている。この点には、当然ながら批判的な意見も少なくなかったが、中村先生は私が「一番槍になります」とその決意を述べられていた。あるとき、私が「先生、一本槍とはどういうことですか」とお尋ねすると「一本槍ですか、ハハハ」と笑われて「確かに、一本槍かもしれませんがね。孤軍奮闘という状況ですからね。」と言葉を継がれて「二本槍ではなく、一番槍です。この一番槍とは、敵陣にいの一番に切り込んでゆくという意味ですよ。そしてその多くは、斃れるのですが、後に続く二番、三番槍がそれを乗り越えて敵陣に挑むのです」と仰った。私は無知を恥じつつも、中村先生が敢えて、日本の学問の独自性形成の為に、極めて刺激的な表現を用いて、後進を叱咤激励したのであろうと、推測している。

この点は「有り体に言えば現在の哲学・思想領域の関心は、西欧の伝統を学ぶ、追従することであり」、所謂「哲学」、というより思想史研究となつている、と述べておられる。この欧米の潮流への追従ともいえる現今の思想研究状況を「全体の傾向として見ますと、問題を取り上げて深く追求するというよりは、むしろあちこちの学説を紹介する。極端にいったら、鸚鵡の学問だと言われても仕方がないのではないか。」（中村元「比較思想の発展」『比較思想研究』一三三頁、一九八六）という表現で、「比較思想研究」にも述べておられる。さらに中村先生は、欧米の学問への追従型の哲学、思想研究を生み出した、日本における学問のセクシヨナリズムの現状を「人間の思想・感情の諸様相の生きた体系を

そのものにとらえようとせず、細分化してしまつて、人間そのものを見失っている」（『比較思想の道——比較思想への批判に答える』『比較思想研究』五号四頁）と表現する。

中村元先生の、そして恐らく比較思想学会の立ち上げに賛同された諸先生の共通意見には、あの悲惨な戦争体験から、思想研究は「人類一般の平和と幸福という目的を達成するためには、世界諸民族の相互の理解を促進しなければならない。」（『古代思想』春秋社、一九七四年、四頁）という強い使命感が認められるであろう。なぜなら、細分化された思想研究は、大局を見失い、結果として社会、人類の正しい方向性を示すという思想研究の役割を見失った日本の過去の苦い体験への反省があつたからではないだろうか。

その意味で、中村元先生が哲学という言葉を取って用いず、「比較思想」とされた理由は、哲学という言葉が、西周により「東方儒学と区別するために欧州儒学を哲学と訳した」（『明治のことば辞典』東京堂）という背景を持つこと、更にヘーゲルなど近代西洋の哲学者達が、インドやシナの諸思想を「真の哲学」が興起するための一種の序曲とみなし、真の哲学はギリシア人の創造」（『古代思想』五頁）とし、その傾向は有名な「哲学史」であるヴィンデルバンドにおいてさえ東洋思想を「哲学と呼ぶ事を拒んでいる」（同六頁）という近代西洋中心主義的への、中村先生の創造的思想運動、つまり挑戦であつたと、筆者は考えている。

いずれにしても、比較思想が目指す知的な活動の目的は「異質的なものを意識して、研究対象に向かつて肉薄してゆく」（『比

較思想研究』同）ということであり、自由で、知的な活動を通じて、真の平和構築に貢献することにある、と理解出来る。その意味で、比較思想学会は、この目的に賛同する一般の人々の入会を歓迎するという活動的な側面も兼ね備えた学会であつた。この目的は、日本の国際化という要請に即応する形で、社会的にも注目されていたが、逆に日本社会の停滞により、日本社会の意識的な収縮と共に、衰微してしまつている様にも思われる。残念ながら、過去の十数年の学会員の減少は、この世相を映しているのではないかと思われる。

二一世紀における比較思想の今後の課題

しかし、実は二一世紀は、二〇世紀以上に、グローバル化が進み、急激な経済のグローバル化の反面、政治や宗教間には、却つて相互不信を増大化させ、深刻な状況に向かつている。その様な状況下であればこそ、ならさらに中村先生が強く主張された「人類一般の平和と幸福という目的を達成するためには、世界民族間の相互理解を促進する」（『古代思想』四頁）ための比較思想研究の一層の努力が求められているのではないだろうか。

しかし、実際、自分の比較思想への取り組みを鑑みると、改めて原点を学び直すことが必須である状況であると、自責の念に駆られてゐる。改めて中村・峰島両先生はじめ草創期の比較思想学会の志を再確認し、さらなる比較思想学会の発展に微力ながら貢献したいと思う次第である。

（ほさか・しゅんじ、比較思想、中央大学教授）